

人とのかかわり

情報通信工学科2年 東 愛実

六月のテストが終わったその日に、坂道のカーブでバイクは転倒しました。バイクは壊れ、私は一ヵ月半の松葉杖生活になりました。痛みもあり、ほとんど動かずに暇をもてあましていたときに会ったのが「五体不満足」でした。

この本の著者、乙武洋匡さんは生まれつき手足がありませんでした。しかし後ろ向きになることなどなく、いつでも前向きに生活してきたそうです。なぜそんなにも前向きに、明るく生きることができたのか・・・それは乙武さんの両親のおかげだと感じました。私は松葉杖で生活していたときは、何をすることも不自由で本当に落ちこんでいました。しかし両親はもちろん、兄弟、友人にさまざまなことを助けてもらい、私は不便ながらも学校を休むことなく通うことができました。乙武さんも乙武さん自身の明るさと、周りの人・・・特に両親のやさしさと愛情が前向きに生きるための力に変わったのだと思います。

夏休みの間に私は小学校一年生から三年生までの子供を預かるセンターでアルバイトをしていました。両親が共働きの子や片親の子たちが、平日の放課後や長期休暇に来る所なのですが、中にはあまり愛情を受けていないように思える子供もいました。そしてそんな子は、何かしらの問題も抱えていました。毎日のおしっこをもらす。友達とうまく遊べない。小さなことですぐに泣く。等です。大したことではないと思われるかもしれませんが、一緒に生活しているとだんだんとこの問題は「愛情不足」からきていると切実に思えてきたのです。小さな問題でも一緒に生活する人、ましてや育てる人にとっては多大な負担になると思います。そのせいで余計に愛せなくなってしまうこともあると思います。しかし乙武さんの家族を見てください。生まれたときから手足が無くても、そんなことをどうでもいいことのように思わせる明るさと愛があります。手足が無いことはただの特徴だと、乙武さん本人に思わせることのできるような愛情が何よりも大切なのだと思います。

「このふたりのもとに生を受けたことを、心から感謝したい。そして、今まで育ててくれて、本当にありがとう。」

五体不満足の中にある一節です。将来子供に心から「ありがとう」といわれたいです。そしていわれても恥ずかしくないようにたくさんの愛情をそそぎたいです。そして16年間、愛情をそそいでくれた両親に言いたいです。たくさん迷惑かけてごめんなさい。産んでくれて、育ててくれてありがとう。大好きです。

五体不満足 乙武洋匡 講談社